

資料3. 各地域における典型的な里地里山の選定等にかかる整理

3-1. 典型的里地里山選定の考え方

■趣旨

<「典型的な里地里山」の捉え方、果たすべき機能>

- ・ 国土の約4割という広がり を考慮すると、里地里山の保全活用には重点的な取組が必要であり、このため地域ごとに典型的な里地里山の保全活用が確保され、そこを拠点に地域全体へ取組が波及していくことが重要。
- ・ 一方、地域での重点的な取組が生態系ネットワークも考慮しつつ進められることにより、国土レベルでの生物多様性保全に寄与することも期待される。
- ・ 重点的な取組とは、保全の優先度や課題解決の緊急性に関わるが、里地里山の多面的価値を考慮すると、何を「重点」とし、どこを「典型的」とするかは、地域の自然的・社会的特性が重視され、地域としての意思が反映されることが前提。すなわち、地域の人々が納得し、保全活用の取組に参加していくきっかけにもなるような里地里山が選定される必要がある。

<国、地方の役割>

- ・ 以上より、選定は、地域の合意の下で地方公共団体（都道府県、市町村等）が行うのが適切であり、選定の観点や基準は地域の選択によるべき。
- ・ 国の役割は、これに対して必要な支援を行う、具体的には、様々な情報提供を行うことが中心。すなわち、「典型的里地里山の選定」及び「選定した里地里山の保全活用」を進めるための考え方やその手法についてまとめ、提示するとともに、必要なデータ提供の便を図ること。

■選定等のために各地域が行う主な検討の項目と検討内容

(1) 選定要素の抽出

○「選定の視点」を定める

- ・ 典型的里地里山を拠点に地域の活動を活発化させていくことに重点を置き、地域の自然的・社会的特性を踏まえ、地域にとっての典型的里地里山選定の視点を明らかにする。(表1-(a)参照)。
- ・ 里地里山にかかる活動は多面的な要素を含むと考えられるため、「選定の視点」は、幅広く考慮できるようにする。

○「選定の視点」にしたがって、選定にかかる要素を抽出する

- ・ 選定の要素を抽出するにあたって、①典型性・代表性の捉え方を整理(表1-(b))した上で、②選定にあたっての着眼点(「環境的側面」「産業的側面」「活動拠点性」)を整理(表1-(c)参照)。
- ・ これらのうち重視する項目を整理(表1-(d))しつつ、さまざまな要素を組み合わせることによって、地域が独自に選定の基準を定めていくこととする。

(2) 生態系ネットワークの考慮

※里地里山活動における生態系ネットワークの考え方については資料3-3を参照。

※典型的里地里山の選定し際し、考慮すべきことは以下の2点。

○当該里地里山とつながる外部(上位)の生態系ネットワークの考慮(広域的な視点)

- ・ 地域にすでに想定されている広域的な生態ネットワークを強化する方向で選定。
- ・ それがない場合も、将来的に上位の生態系ネットワークが構築され発展していくよう選定。

○当該里地里山内部での生態系ネットワークの考慮

- ・ 限定された範囲の中での生態系や種の交流が分断されることのないよう、範囲等を選定。

(3) その他の留意事項

○上位計画：前提とすべき上位計画がある場合、整合性を保ちながら選定。

○地域バランス：取組への参加を促すことも目的の一つであり、地域的な配分への配慮も重要。

(4) 地方公共団体による具体的な場所の選定にかかる計画(案)の作成

- ・ 選定に必要なデータの収集、選定基準の適用(=候補地の抽出、絞り込み・選定)、地域の意向の反映方法などの手順については、事例(資料3-2)等を参考に、今後整理。

表 1 選定の視点と対応する要素

(a)選定の視点		活動拡大に起因する社会的条件（地域のキーパーソン・体制、アクセス性、活動の継続性など）			
		環境共生型農林業 ⇓	生物多様性保全 ⇓	伝統的生活文化や景観 ⇓	環境教育等の場としての活用 ⇓
(b)典型性、代表性の捉え方 (例)		<ul style="list-style-type: none"> 地域の気候、地形、土壌などの条件を活かした地域らしい営農法を実施 伝統的農法や土地利用が営まれている 	<ul style="list-style-type: none"> 地域を代表する植生がみられる 地方版 RDB 種の生育・生息地 地域固有種の生育・生息地 生物群集の多様性を特徴づける種や生態遷移を特徴づける種の生育・生息地 	<ul style="list-style-type: none"> 地域らしい生活や生産の営みが反映、地域の風土が表現されている 伝統的な生活文化や技術が継承されている 地域の人々が慣れ親しんでいる、誇りに思っている 地域外からの来訪者が多い 	<ul style="list-style-type: none"> 里地里山の環境を活かした環境教育等が盛ん 他の地域にはない固有のプログラムが行われている エコツーリズムやグリーンツーリズムの場として活用されている
(c)選定にあたっての着眼点 (選定の視点への対応)	環境的側面	<ul style="list-style-type: none"> 循環型農法の継承、実践 伝統的水利技術の利用 	<ul style="list-style-type: none"> 生物多様性が高い 地域の固有種、貴重種などが生育・生息 	<ul style="list-style-type: none"> 地域らしい景観の保全 地域固有の生活文化の継承 	<ul style="list-style-type: none"> 環境教育に適した資源が豊富 自然再生の場としての役割を果たしている
	産業的側面 (農林業の活力、維持管理の持続性)	<ul style="list-style-type: none"> 産業としての活力の維持 特色ある営農法の実践 地域品種の維持 農林産品の高付加価値化 	<ul style="list-style-type: none"> 生物多様性を活かした農業技術の開発・実践 	<ul style="list-style-type: none"> 地域の生業による持続的な維持管理のための基盤の確保 外部交流を通じた山村文化の継承・再生 	<ul style="list-style-type: none"> 環境教育の素材として、地域の農林業が継続
	活動拠点性 (現状・可能性)	<ul style="list-style-type: none"> 里地里山保全活用への取組の核になる団体等が存在 地域内・外の交流がある 活動が盛ん 			<ul style="list-style-type: none"> 地域に取組への気運が幅広く見受けられる 都市圏からのアクセス条件がよい、訪れやすい
(d)選定にあたり重視する点 (例) *「◎」「○」も地域が決める		◎産業としての活力の維持 ○循環型農法の継承、実践	◎生物多様性が高い	◎地域固有の景観、文化 ○持続的な維持管理の基盤確保	◎環境教育に適した資源 ○地域の農林業の継続 ○活動が盛ん
選定の手順、基準等にかかる事例（3-2参照）		<p>← 参考事例 1（にほんの里 100 選） →</p> <p>← 参考事例 2（石川県） →</p> <p>← 参考事例 3（福井県） →</p>			

3-2. 典型的里地里山選定手順にかかる参考事例

【参考事例 1】にほんの里 100 選

項目	内容
選定の視点	環境共生型農林業/生物多様性保全/伝統的生活文化やふるさとの景観/環境教育等の場
実施主体	朝日新聞社、(財)森林文化協会
選定手順	①選定基準・募集要項の公表・公募（応募総数 4,474 件） ②選定委員会による予備選考・候補地の絞り込み ③候補地 200 ヶ所の現地調査の実施 ④選定委員会による第 1 次選考 ⑤選定委員会による最終選考
選定基準	次の 3 要素を選定基準とし、里地里山を選定。 【景観】暮らしが生み出した特色ある景観が、まとまりを持ってみられる。或いは、里地の景観が全体として調和していて美しい。 【生物多様性】かつては里でよく見かけた動植物が今も健やかに生きている。或いは、そうした生き物や生育・生息環境を再生する試みなどがある。 【人の営み】景観や生き物を支え、里地のめぐみを生かす暮らしや営みがある。或いは、そうした暮らしを築き持続させようとする人々がいる。
選定地域等	【選定地域・地区】各都道府県から 1-4 地域選定、計 100 ヶ所選定。 【景観タイプ】里を構成する景観を 12 タイプに分類・評価 集落、河川、池沼、湧水、湿地、海辺、水田、畑、茶畑、果樹園、草地、里山
選定事例	◆北海道・黒松内町ー北限のブナで町おこしー ・町ぐるみで「ブナ北限の里づくり」を推進。観察会やフットパスを通じ、自然の恵みやブナ林の役割を考える取り組みが続く。 ◆秋田・八森（八峰町）ー禁漁でハタハタを復活ー ・漁業と林業の町。乱獲で衰退したハタハタを禁漁で復活。秋田の伝統食文化を守り、活気を取り戻す。地元有志による植林活動。 ◆群馬・秋畑那須（甘楽町）ー「ちいじがき」の里ー ・傾斜地に「ちいじがき」と呼ぶ小石を積んだ石垣と段々畑。放棄畑の活用と地域活性化を図るそば打ち体験・オーナー制が好評。 ◆長野・小川村ー癒やしの郷の住民パワーー ・北アルプスと四季折々の農村風景。「癒やしの郷（さと）」づくりがうたい文句。リンゴ、米、大豆などを生産。住民が率先して圃場（ほじょう）整備。 ◆山口・祝島（上関町）ー耕作放棄地で放牧養豚ー ・自ら生態系を守り、1次産業再生に努めることを自治会規則で確認。無農薬のビワ栽培、野菜くずなど島内の資源で豚も飼う。 ◆愛媛・城川町田穂（西予市）ー接待の場「茶堂」健在ー ・巡礼者に飲食をふるまうことで自分も功德を積む「お接待」の場である東屋（あずまや）風の茶堂が、棚田の脇に健在。虫送りの行事も残る。 ◆沖縄・やんばるの森（国頭町）ー亜熱帯の森に希少生物ー ・ヤンバルクイナなど希少生物の宝庫。村民の 20%が 1次産業に従事し、生態系や潮の干満などを生かした伝統的文化・行事が残る。
参考文献	にほんの里 100 選 http://www.sato100.com/yoryo/index.html

【参考事例2】重要な里山生態系地域（石川県）

項目	内容
選定の視点	環境共生型農林業/生物多様性保全/伝統的生活文化やふるさとの景観/環境教育等の場
実施主体	石川県環境安全部自然保護課
選定手順	<p>【①希少種データの整備】県 RDB の分布情報を 3 次メッシュレベル(鳥類のみ 5km メッシュ) で積み重ね、分類群毎に取りまとめた。また、専門家から指摘のあった地域・ふれあいや景観の観点からの重要地域を 3 次メッシュレベルでまとめた。</p> <p>【②オーバーレイ】①の情報を重ね合わせ、多くの種群で希少種が集中している地域を抽出。</p> <p>【③重要地域の表示】重要地域は 3 次メッシュを単位として抽出、重要地域は外郭線を設定せず、概ね中心となる地点のみをドットで表示。</p>
選定基準	<p>次の 3 の観点から「重要な里山生態系地域」を選定。</p> <p>【希少種生息地等】</p> <ul style="list-style-type: none"> 希少種の種密度・個体群密度が高い／希少な植生等（特定植物群落等）が成立する。／指標種の種密度・個体群密度が高い。 <p>【優れた景観】</p> <ul style="list-style-type: none"> 県下の里山の景観保全上重要で、是非残すべきと判断される。 <p>【ふれあい資源】</p> <ul style="list-style-type: none"> 農林業との共生を図りつつ、自然環境の保全再生のための取り組みがなされている。 行政もしくは民間団体等による里山保全活動が行われている。 豊富なふれあい資源を維持保全すべきと判断される。 すでに里山保全活動のインフラ整備がなされている。
選定地域等	【選定地域】 25 ヶ所選定。※地域の外郭線は設定せず、中心をドットで示した。
選定事例	<p>◆珠洲市のため池群（選定基準：希少種生息地等・優れた景観）</p> <p>伝統的な農法・管理により維持されたため池が多く、各種の希少な水生昆虫等をはじめ、オオヒシクイの越冬や希少な鳥類の生息地。希少種保護の観点からは県下で最も重要な里山地域のひとつ。コンクリート護岸等の改修の抑制、従来の維持管理方法の継続とともに、農薬等による水質悪化やオオクチバス等外来種の侵入防止が重要。</p> <p>【選定後の活動】</p> <p>環境省・生物多様性保全推進支援事業の一環として、ため池群におけるビオトープ整備や外来種防除などが実施されている。</p> <p>◆石川県森林公園・河北郡津幡町（選定基準：優れた景観・ふれあい資源）</p> <p>全国でも有数の規模の森林公園。広大な落葉広葉樹林やスギ植林地をはじめ、池や湿地もあり多様な環境を有している。また、拠点・利用施設も充実。利用者が多い。適度な手入れによる明るい森林を維持創出し、30～40 年前の里地景観を再現した典型的な雑木林。</p> <p>【選定後の活動】 県・津幡町・金沢大学等の協力により 2010 年に MISIA の森プロジェクトが発足。企業等の協賛で森林保全活動、環境教育活動等が実施されている。</p>
参考文献	<p>石川県環境安全部自然保護課（2004）パンフレット『いしかわの里山生態系次の世代に伝えるために』</p> <p>（財）自然環境研究センター（2004）平成 15 年度里山生態系保全調査報告書,189pp. 環境省・生物多様性保全推進支援事業</p> <p>http://www.env.go.jp/nature/biodic/shien/projects/h20-gaiyo.html</p> <p>MISIA の森プロジェクト http://satoyamabasket.net/forest/</p>

【参考事例3】 守り伝えたい福井の里地里山 30

項目	内容
選定の視点	生物多様性保全
実施主体	福井県自然保護課・福井県自然保護センター
選定手順	<p>【①文献調査による調査対象メッシュの抽出】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 県 RDB 種の 2km メッシュの分布情報、また最新情報を基に RDB 種が多く記録されている地域を抽出。 <p>【②対象種、対象環境の絞込】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 対象種として里地里山環境への依存度が低い種を除外。 ・ 重要里地里山地域（農林業を初めとする人間の営みと密接に関わり成立している生態系/県 RDB 種のホットスポット）の絞り込み <p>【③現地調査】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ①②で抽出した地域から調査委員会（専門家）の検討を経て、選定委員会により調査地を選定し、RDB 種の現況調査を実施。また調査者が併せて実施した自主調査地のデータも収集。 <p>【④重要里地里山の選定】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 調査結果を基に環境の連続性や同一性を考慮し、各調査地を合併あるいは単独で整理し、以下の基準を基に調査委員会の検討を経て、選定委員会で選定。
選定基準	<ul style="list-style-type: none"> ・ その地域を含む周辺の里地里山で、県レッドデータブック掲載種（県 RDB 種）が多種確認されている。 ・ 県 RDB 種の県内の代表的な生息・生育地である。 ・ 県 RDB 種の繁殖地、越冬地、または旅鳥の重要な中継地点になっている。 ・ 県 RDB 種の県内唯一の生息・生育地である。
選定地域等	<p>【選定地域・地区】 奥越、坂井・福井、丹南、二州、若狭の 5 地域・30 地区</p> <p>【県 RDB 種数】 10～100 種</p> <p>【選定面積の範囲】 約 20～5,000ha</p> <p>※選定区域は曖昧にし、境界線はぼかして表示。</p>
選定事例	<p>◆勝山市長尾山（里山・湿地）</p> <p>【該当地】 該当地の景観写真、地図を掲載（省略）</p> <p>【選定理由】 県 RDB 掲載種サクラバハンノキの代表的な生息地。県 RDB 多数確認。</p> <p>【県 RDB 種数】 10 種（面積 140ha）</p> <p>【自然の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ なだらかな丘陵状の里地で、谷奥の湿地がサクラバハンノキの代表的な生息地となっている。大径のアカマツ林が林立する尾根部には、オオタカやハチクマなどの猛禽類やニホンリスなどが生息する。 <p>【保全すべき主な環境】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 巨木林（アカマツの大径木林） ・ 湧水湿地（サクラバハンノキの生育する湿地） <p>【保全すべき環境に生息・生育する生物】</p> <p>オオタカ、ハチクマ、サンコウチョウ、ニホンリス、サクラバハンノキ</p>
参考文献	<p>守り伝えたい福井の里地里山</p> <p>http://www.fncc.jp/joho_kensaku/syuzo_siryu/satochi_satoyama/sato1.htm</p> <p>環境省自然環境局生物多様性センター（2004） 第 6 回自然環境保全基礎調査 生物多様性調査・種の多様性調査（福井県）報告書,100pp.</p>

3-3. 里地里山の選定における生態系ネットワークの考慮について

里地里山活動における生態系ネットワークの考え方

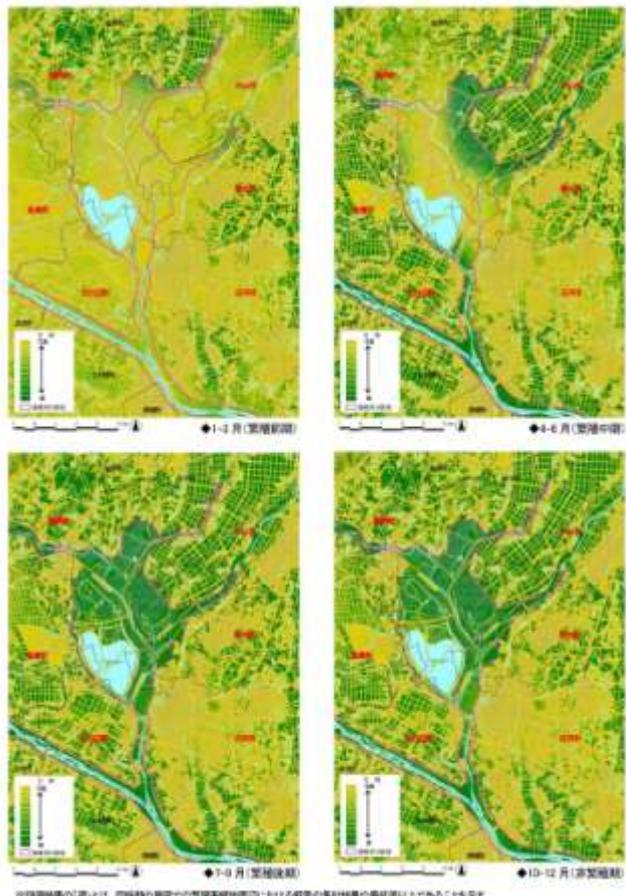
- ・ 生態系ネットワークには様々な考え方があるが、ここでは「一定の空間スケールでの生態系や種の交流（物質、個体、遺伝情報などのやりとり）」と考える。
- ・ 里地里山活動を通じて、地域の生態系や種の生態系ネットワークの維持・促進・創出が可能となるよう配慮する。
- ・ 生態系ネットワークを考慮することで、里山里山の選定、活用の上で特に配慮すべき場所や環境要素の特定にあたり、保全・再生すべき場所や環境要素の優先度の比較が可能である。

里地里山の選定・活用にあたっては、以下の表1に示したような観点について配慮することが望ましい。ただし各観点は独立で考慮するものではなく、相互に関連していることに注意が必要である。またこの概念整理を踏まえた里地里山活動における配慮のしかたの例、及び参考となる既存事例も提示する。

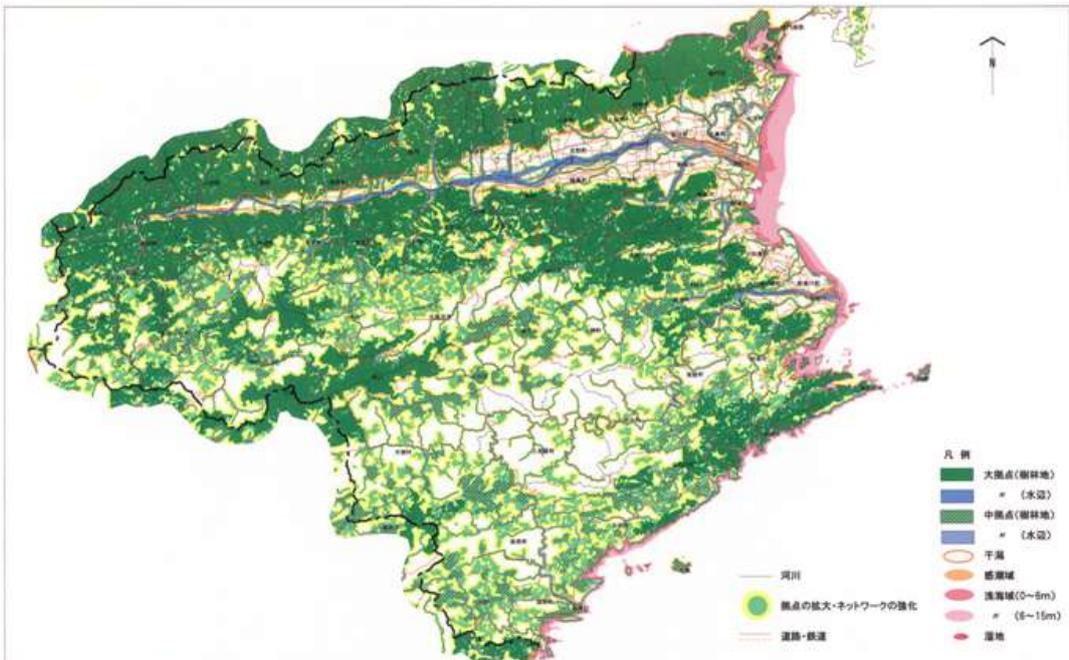
表1. 生態系ネットワークの概念と配慮のしかたの例

観点	①指標とする生態系・種	②空間スケール	③空間配置
考え方	各観点を抽出した理由	森林・河川などの生態系や、動物・植物などの生物種によってそれぞれ望ましいネットワークの状態は異なるため、どのようなものを指標とするかを明確にする必要がある。	生態系ネットワークを維持するためには、活動範囲や指標とする生態系・種に応じて、適切な空間スケールを想定する必要がある。
	考慮すべき点	生態系ではエネルギーや物質（水・栄養素等）の循環、種では生活史（産卵・営巣・季節的移動等）、種内・種間の相互作用（捕食-被食関係、受粉等）を考慮する。	生態系ネットワークを維持するためには、生態系や種の生息域が適切に配置されている必要がある。
	適切なネットワーク構築の手がかり	実際の保全活動にあたっての利用可能性を考慮すると、 <ul style="list-style-type: none"> ▶ 保全や生態に関する知見が得やすいもの ▶ 保全目標となりうるもの（フラッグシップ種等） ▶ 環境アセスメントにおける注目種の選定の考え方（上位性、典型性、特殊性） 等の観点からモニタリング可能な1～数種類を選定する。	生態系ネットワークを維持するためには、生態系や種の生息域が適切に配置されている必要がある。
配慮のしかたの例	里地里山活動地域の保全対象の1つが小型サンショウウオであれば、活動地域内や周辺での小型サンショウウオの産卵地（水田・ため池などの止水環境）と成体の生息地（森林）が空間的に隣接し分断しないように配慮する。	里地里山活動の実施範囲が市町村レベルであれば、それを基準として、その下位（活動地域内部）、および上位（活動地域が含まれる地方スケール）の生態系ネットワークを考慮する。	コア、バッファ、コリドー、ステップストーン等の役割を持つ地域がどのような配置をしているかを考慮する。
参考事例	事例1：上位種・フラッグシップ種としてトキ・コウノトリ 事例3：水田を産卵地として利用する琵琶湖の淡水魚類	事例1：地方レベルの計画 事例2：都道府県レベルの計画 事例3：大字レベルの計画	事例2：コア、コリドーなどの役割を持つビオトープの配置計画の立て方

事例 1

名称	南関東地域における水辺環境エコロジカル・ネットワーク形成による魅力的な地域づくり検討調査	
計画主体	国土交通省国土計画局広域地方計画課	
策定・実施年	2011年（平成23年）3月に計画案作成	
空間スケール	地方レベル	
主な内容	<p>◆目的</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 豊かな生態系の指標として、生態系の頂点に立つコウノトリやトキに着目 ・ 様々な機関が連携し、環境と経済の調和を図った地域振興・経済活性化の方策を検討することにより、広域連携モデル作りを行う。 <p>◆考え方・手法など</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ コウノトリ・トキを指標とした水辺や農村環境の保全・再生方策を検討。 ・ コウノトリ・トキの野生復帰をシンボルとした魅力的な地域づくりとしての地域振興・経済活性化方策を検討。 <p>◆具体的な取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 計画案の段階であり、現状で具体的な取り組みはない。 	
里地里山との関連性	南関東の水田を中心とした都市近郊の里地里山を対象としている。農地の高次捕食者であり、自然再生の象徴であるコウノトリ・トキを指標種として、里地里山の生息環境を評価している。	
ネットワークの現況または将来像		<p>渡瀬遊水池におけるコウノトリの生息環境評価</p>
参考文献	URL: http://www.mlit.go.jp/kokudokeikaku/kokudokeikaku_tk5_000064.html	

事例 2

名称	とくしまビオトープ・プラン
計画主体	徳島県
策定・実施年	2002（平成 14）年 3 月に策定
空間スケール	都道府県レベル
主な内容	<p>◆目的</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成 13 年に始まった「ふるさと自然ネットワーク構築事業」の一環として、「徳島県新長期計画」、「徳島環境プラン」の方針、施策を具体化したもの。 多様な生物が生息・生育するビオトープを保全、復元、創出し、さらに生物を長期間にわたって守っていくために、ビオトープのネットワーク化を目指す。 <p>◆考え方・手法など</p> <ul style="list-style-type: none"> 樹林地と水辺の 2 つに分けてビオトープネットワークを検討。ただし、両方を生息空間としている種も少なくないことから、2 つのネットワークの連結も考慮。 ネットワークの構成要素として、「大拠点」「中拠点」「小拠点」及び各拠点をつなぐ「回廊」を設定。この他、面積と関係なく本県の生物多様性の保全にとって重要な場所をネットワークに位置づける。 <p>◆具体的な取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ビオトープ現況図、ビオトープネットワーク方針図を作成 県、県民、民間団体、事業者等が実施するビオトープの保全、復元、創出に関わる取り組みから、質の高いモデル的な事業をビオトープ 100 として選定 県内で実施されたビオトープ事業の内容をデータベース化
里地里山との関連性	ビオトープの保全、復元、創出について地域類型別指針が示されており、田園里山地域については「休耕地を活かしたビオトープの復元」、「伝統的な農業や農村の生活に育まれてきたビオトープの保全、復元、創出」等が指針としてあげられている。
ネットワークの現況または将来像	 <p>凡例</p> <ul style="list-style-type: none"> 大拠点(樹林地) 中拠点(樹林地) 小拠点(樹林地) 水辺 水辺 水辺 干潟 感潮域 浅海域(0~5m) 浅海域(5~15m) 湿地 河川 農地の拡大・ネットワークの強化 道路・鉄道 <p>広域ビオトープネットワーク方針図</p>
参考文献	URL: http://www.pref.tokushima.jp/docs/2010101800117/

事例 3

名称	魚のゆりかご水田プロジェクト
計画主体	滋賀県（農政水産部農村振興課にぎわう農村推進室）
策定・実施年	2001年（平成13年）から事業を実施
空間スケール	大字レベル
主な内容	<p>◆目的</p> <ul style="list-style-type: none"> 琵琶湖に生育するニゴロブナやコイ、ナマズなどにとって絶好の産卵・繁殖場所である水田や排水路を魚が行き来できるようにし、かつての命溢れる田園環境を再生し、生きものと人が共生できる農業・農村の創造を目指す。 <p>◆考え方・手法など</p> <ul style="list-style-type: none"> 魚道設置に当たっての調査・設計・実施のマニュアルを作成するとともに、整備の後の管理のために「魚のゆりかご水田の栽培カレンダー」を整備。 <p>◆具体的な取り組み</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成13年から平成20年3月現在までに「魚のゆりかご水田」として18地区（81ha）で事業を実施。 平成13年度から魚道設置プロジェクトに着手、平成16年には排水路堰上式水田魚道を開発。 平成18年度には魚道の設置により遡上が可能となった琵琶湖周辺の水田約40haで地域の維持管理団体に対して環境直接支払いをパイロット的に実施。 事業についてのPR活動やブランド米（魚のゆりかご水田米）の販売。
里地里山との関連性	里地里山の重要な要素である水田や排水路の生態系ネットワークが生息に重要な役割を果たしている淡水魚類（ニゴロブナ、コイ、ナマズなど）を指標種としている。
ネットワークの現況または将来像	<p>平成20年3月までに事業が実施された18地区</p> <p>■ 現在まで、事業が実施され、魚のゆりかご水田として向まされど計画 ■ 魚のゆりかご水田の実施に意図した区域 【平成20年（2008年3月現在）】</p>
参考文献	URL: http://www.pref.shiga.jp/g/noson/fish-cradle/index.html